

---

# 風神様《カザガミサマ》が翔る空

夢幻の破片

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カザガミサマ  
風神様が翔る空

### 【ZPDF】

Z0737D

### 【作者名】

夢幻の破片

### 【あらすじ】

空から落ちてきた。なにがって?隕石でもない。飛行機でもない。じゃあなんなんだって?それは……。

## 風の始まり～墜落した風神～（前書き）

この小説は、話によつてジャンルが大幅に、そしてランダムに変化します。それだけは忘れないで下さい。

## 風の始まり～墜落した風神～

両親が他界して何年経つたのだろうか…。  
自分が小さい時に交通事故で死んだのだ。

今は十七、両親が死んだのは俺が四つの時だから…、そう、十三年  
経つたんだ。俺の名前は桜臘靈おうらうじ 灯也。

今、桜臘神社という、神社の神主をしている。

何故こんな歳で神主をしているか、頭のいい人は納得するだろう。  
そう、先に述べた通り、両親が他界したからだ。

父さんも神主をやっていた。桜臘靈家は代々この神社を継いできた。  
大体、三十から四十才の内に次の代の者に神主を交替してきたりし  
い。

しかし、父さんは交通事故で死んでしまった。

だから、自分が代わりに神主をしている。

幸い、山奥のひつそりとした神社だから、参拝する人も少ない。  
自分がしつかりしていれば大丈夫だ。

お金は、…両親がかけていた生命保険とやらのお陰で、腐るほどあ  
る。

…自分や爺さんや婆さんが使いきれないくらいに。

神社はそれぞれ祀まつっている神がある。

桜臘神社が祀つているのは風神だ。

ほら、稻荷像がある神社があるだろう?

あれは九尾の狐、玉藻の前を祀つている証だ。

桜臘神社には鴉天狗の像がある。

鴉天狗は風神級の風を起こせることから、一部で風神と言われてい  
る。

この桜臘神社もその一部に入る。

都内の神社は雷神、先に述べた九尾の狐等、様々な神を祀つてある。

まあ、そんなことは参拝する人々には関係ないだろうが。

「……ふう、もう落ち葉は無いな。さて、

お茶でも飲もうか

自分で言ふのやがんがん  
祥祥を緋くため自分は高橋には行  
かない。

そのため、最近の流行はその他色々なことに疏い

たまに来る姫なしのヤロウ時代の方へ運んで貰う」と言ふ  
れている。

確かに、シリスよりお茶が好きだし、

夜の事だつた。

隕石？と思つて、落下地點だと思われる裏庭に行つてみた。

そこで、自分は凄まじい光景を目の当たりにしたまづ、黒つぱり羽が散乱してしまった。

次に、辺りが水浸しだつた。

そして、池には…女の子が、落ちていた。…溺れている、と言つた

方が正しいのだから

ばたばたさせていた。

黒で見ていたのが、力が弱くて、思想にかかって、まづうて、

「ガハツ！ゴボツ！ガツ！ハア…ハア…ハア…」。

「ひやから本筋に溺れていたらしい。」

「落ち着いて、落ち着いて。大丈夫かい？」

少女である。

「せこ、お懸れまど。」

…復活も早いらし。」

「どうしたの？…とこつより、この状況は…？」

状況確認。「はい、すいません。落ちてしまいまし

た。」

そして意味不明。

「…落ちた？」

「はい、空を飛んでいたらいきなり羽が小さくなつて、飛べなくなつて、落ちました。」

「羽？ 空を飛ぶ？」

少女の背中を見てみる。…小さい黒い羽がピラピラと動いていた。

「…君は…？」

「えつと、風見鳥 かざみどり あや 彩です。単刀直入単純明快に言いますと、鴉天

狗兼風神です。」

いや、いつぺんに言われても…風神？

「…羽は作り物じやあ無いようだし…本物？」

一応確認。

「はい。本物です。」 見事的中。

「…えつと、どうしたのかな？えと、鴉天狗なのかな？それとも、風神なのかな…？」

「えつと、鴉天狗が風神といつ仕事をしていと解釈して下さい。私はまどろつこしいので、神としての風神 ふうじん とは言わずに、仕事としての風神、風神 かざがみ と、訓読みで呼んでいます。」

…近頃の神は仕事なのか？

「…で、そのカザガミの君が、なんで空から落ちたの？飛べるんじやないの？」

「さあ…？多分、羽が小さくなつたのは鴉天狗の力とは関係無いはずなので、風神としての力が弱まつたんじゃないかと思います。」

「…なるほど。別々なんだ。…その風神の力が弱くなつた原因つてわかる？」

疑問だらけである。

「…神の力って、神社や寺と同じなんですよ。」 『めん、わからぬ。』

「ほり、神社や寺って、参拝する人が多ければ多いほど比例して大きくなっちゃになりますよね？」

確かに。

「神も同じで、信仰する人が多ければ多いほど比例して力が大きくなるんです。」

…とゆうことは？

「つまり、風神を信仰する人が少なくなつたから、風神としての力が少なくなつて飛べなくなつたと？」

「はい。多分そうです。」

…いや、ちょっと待て？

「鴉天狗も飛べるんじや…？」

彩は衝撃を受けた様な顔をして…

「つー！確かにそうですー！…つてことはもしかして鴉天狗との力も弱くなつたってことですかー？「わーーーん！ー！」

…泣きだした。

慰めようと声を出そうとして口を開いた。

…が、しかし。

今所、すぐに空に帰してやれる訳もなく、その、鴉天狗の力を元に戻してやれるわけでもない。

変な慰めはかえつて彼女を傷つけるのでは…？

…そう、思った。

三分後

ようやく泣き止んだ彩が、ポロリと一言呟いた。

『どうしよう…。何処にも行く宛てないし、雷神ちゃん達にも迷惑かけたくないし…あうううう…。』

…しつかり聞こえるよ。…雷神？

…あつ…そういえば…

飛びなくなつた第一理由として、信仰の力（神としての力…神力？）  
が足りなくなつたのが原因だつたはず。

…と、いつことはつまつ、風神を信仰する人を増やせばいいんじや  
…？

もしそうだとしたら、ここはつてつけの場所じやないか。  
「じゃあさ、ここでしばらく一緒に居ないかい？」

「…ふえ？」

「ほら、ここ神社だしさ、君が協力してくれれば参拝客を増やせる  
かもしけない。なんの偶然かわからないけど、一応風神を信仰して  
るんだ。この神社。ね。君は力を取り戻す。さらに神社は評判にな  
る。…お互に一石二鳥じゃないか。」

彩は半泣き声で、しかし嬉しそうな顔をして、

「いいんですか…？自慢じやないですけど、私よく他の神から て  
んねん とか どじ とか言われるんです。…えつと…？」

「灯也。桜臘壇灯也だよ。」

「あ、すいません。…その、灯也さんに迷惑をかけてしまつかもし  
れませんが、そんな私でも…いいんですか…？」

もじもじと妙に可愛らしい仕草をしながら、心配そうに尋ねてくる。  
そんな彼女が可愛くて、つい、こんな言葉を口からこぼしてしまつ  
た。

「別にいいよ。…何ていうかさ、寂しい…つて訳じやないんだけど  
一人きりつてつまんなくてさ。一人で居るより二人のほうが…なん  
ていうか…楽しいと思うから、ね。」

彩は泣きだしながら…

「…つづく、ひつづく、ふえええ～～～ん！…ありがとおじぞいま  
す…！ちゃんと働きますう…！」の恩は忘れません…」

…いや、そんな大袈裟な。

…とまあ、こんな感じである。つい昨日  
のことだ。

そして隣には…

「えへへ…灯也さん…。」

と、彩が自分に寄り添つて いるの だつた。

…これから、どうなるの だらうか…？

無事に、彩を空に 帰して やれるの だらうか…？

… そんないが頭をよぎつ ていた。

「序の風・ア」

風の始まり～墜落した風神～～（後書き）

…ホント、どうなんでしょうな？（　作者もわからない。　）

# 一の風 ～協力者なのか恋敵なのか…～

「シュークリーム二つ下さい…」

店内に透き通つた元気な声が響いた。

何事か？と思つて声の発声源を見やる他の客。

少し、はりきりすぎたかな？

そう思い、声の声量を少し絞る。

「はい。シュークリーム二つ。」

店員のおじさんガシュークリームを渡してくれた。

「ありがとうございます。…はい、三五百円。」

お代を渡す。

「ちょうどね。…いやあ、いつもいつもありがとうございます。…彼氏に渡すのかい？」

結構フレンドリイである。

「いや、か、かか、彼氏だなんて、灯也はそんな…。」

そんなに顔真っ赤にして個人名出した時点でバレバレだよ。

「そ、そそ、それじゃ！またね、おじさん！」

少女が店を出た後：

「ふう…。しかし、その灯也君とやらも幸せ者だなあ。あんな可愛い子にあれだけ好かれてるんだから…。羨ましい限りだね。」

…あ、そういう

う、紹介が遅れたね。

この歌姫なのが元気つ子なのかよくわからない長髪の少女。

名前は水無月 みなづき かなな 神流 かんな といつ。

灯也の幼なじみで、…見ての通り、彼にベタ惚れである。

部活の無い日はいつもお菓子を持って彼の居る神社に足を運ぶのである。

…がしかし、ここままでされても灯也は彼女が自分に惚れていると気が付いていない。

……いわゆる鈍いといつやつである。（それも半端なく。）

そして彼女は今日も桜臘神社に足を運ぶのである。

……また二人で縁側で座つてお菓子を食べながら手を繋ぐため。

……がしかし大半の人人が想像している通り、今回はそうはいかなかつた。

神社の鳥居を

潜る。

灯也を呼ぼうと声を出す。

「お～い、灯也～！さ～た～よ～！～」

……と、いつもならここで灯也が返事をするのである。

……がしかし、今日はかわりにこんな 音 が聞こえてきた。

ズンガラガツツシャーネン…パリン… ハロハロ…

「…………は？」

今のは明らかに何かを落として盛大に割つた音である……しかも、この音の大きさから考えて半端な量ではないはず。

まさか、灯也に何かあつたのでは！？

そう思つた瞬間には足がもう駆け出していた。

……そして、音のしていたと思われる部屋につく。

「ああ……ああああああ……！」

顔が青くなる。

人一人簡単に埋まつてしまつ程の量の皿の山が崩れ落ちていた。

「灯也……」

皿を退かそうとして皿に手をかけたその時。

「彩～ど～した～！…ん？やあ、神流。来てたのか…ってなんだその皿の山は～！」

「ふえええ…すいませ～ん。皿を洗つた後山にして積み上げていたら、ぐらぐらしていたのに気付かなくて…で、こうなつちやいましたあ…。」

「そんなことはどうでもいいんだ…！怪我は無いか…あつ！腕切

つてゐるじゃないか！－待つてろ、包帯持つてくるからな－－」  
ドタドタと音をたて、灯也が包帯を取りに走つてゆく。

…そして残つた二人。

「……誰？」

「……ふえ？」

…自分が来な

かつた一週間の間に何があつたのだろう？

自分の想い人が、いつのまにか自分より可憐い女の子と同居（同棲）？）している。

…何度も首を傾げてもわからない。

いや、その子（彩と言つらし）が 空から落ちてきた という話は聞いたが、どうも怪しい。

…けれど、その子の背中の小さい翼を見る限り、とても作り物とは思えない。

…でも、納得いかない。

でもだからつてその子をどこかにやる宛も無い。

ましてや、自分の家に見知らぬ他人を住まわすなどと、馬鹿なこともできない。

…じついうのを八方塞がりというのかな？

「あの…どうかしましたか？」

「え？……いや、別に。何でもないわよ？」

「……そうですか？何か、俯いていたので…。」

「俺もそう思つたぞ。どうした？腹が痛いのか？」

灯也のことでなやんでるんでしょうが…！

…いけない、怒ると灯也に嫌われる…。

「ううん、大丈夫。ありがと灯也。」

「……そうか？いや、別に大丈夫ならいいんだが…。」

三分後

「…で、今は服で翼を隠して人界の常識を灯也習つてるつてわけ？」

「はい。やつです。でも、毎回灯也さんに迷惑をかけてしまって……。」

彩が萎みながら答える。

「別に気にしてないよ。」

それを、灯也がフォローする。

「……ただ、さつきみたいに彩が怪我したりしなければいいんだけどね……。」

「……突き落としたいのか？あんたは？」

「ふえええ……すいません……。」

「まあ、とにかく。ちゃんとこいつの常識を覚えたら、今度は参拝客集めするつてこと？」

「そうなんだよ。常識が云々より、参拝客集めがうまくいくかどうかがわからないんだよなあ……。」

まあ、たまに抜けた行動をする彩にとつて、常識も案外重要なのが。

そんな事を考えていた灯也に返つてきた言葉は意外なものだった。

「なら、私も手伝うわ。」

「……いいのか？」

「本当ですか！？」

彩の顔が一瞬にして明るくなる。

「まあ……ね、いつもここに来てるし、部活無い日は来れるから。（それに、ここに来る口実も増えるし。）」「

「そうか、ありがと。」

灯也が微笑むと神流の顔が瞬く間に赤く染まった。

「べ、べべべ、別にあんたのためじゃないからね！？彩のためなんだから……。」

「神流さん……ありがとうございます。」

彩を早く空に返してまた灯也と一人きりになる という下心があつた神流にとつて、素直に感謝する彩の言葉は微妙に耳に痛かった。



一の風 ～協力者なのか恋敵なのか…～（後書き）

“どんなラブコメでも必ずでてくるタイプの奴がきましたよ…。（作者風邪気味）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0737d/>

風神様《カザガミサマ》が翔る空

2010年10月15日09時10分発行